

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01662

研究課題名(和文) スポーツ史研究におけるトランスナショナルなパラダイムと錯綜史の試み

研究課題名(英文) Transnational Paradigm and Entangled History in the Studies of Sport History

研究代表者

池田 恵子 (Ikeda, Keiko)

北海道大学・教育学研究院・教授

研究者番号：10273830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はJoyce Goodman氏が提示したトランスナショナルなパースペクティブに基づく方法論上の示唆に基づいている。一連の研究成果は国際刊行物ないし国際学会における口頭発表にて公表した。いずれも、国家の枠組みを解体したスポーツ史研究が既存の通史理解の盲点をあぶりだし、世界史的観点からの尺度評価を必要とすることについて論じている。一例を挙げれば日本の山岳史に影響を及ぼした英国の外交官のトランスナショナルな歴史に注目することで、山岳史というものが、スポーツ史研究という分野と一国史を超えた、言語・歴史・地理・自然科学史の世界史に貢献するものであることを指摘している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでのスポーツ史研究は、個々人による個別テーマ研究に帰するところが多く、国籍を超えて共同研究を行うには限界があった。本研究は、一国史を超えた世界史のトランスナショナルなスポーツ史像の確立を目指す研究であるため、自ずと海外における研究者との連携が必要となる。研究成果の公表もその協働の成果として、国際的な言語で公表することが不可欠であった。したがって、海外の研究者との連携体制を確立し、国際体育スポーツ史学会(ISHPES)等の国際的な学術の公表の機会を重視した。とりわけ、大英帝国主義が日本に与えた影響を国際的に明示することで、今後国際的な共同刊行物や国際共著として出版できる可能性を生んだ。

研究成果の概要(英文)：This study uses a transnational perspective first incited by Joyce Goodman. I produced papers in the international congress and publications as outcomes of this study during the three-year period of this research fund (2017-2019). Each paper argued for the dismantling of traditional frameworks of a nation or national history, which have led to incorrect understandings of world-wide interwoven connections. The criterion for evaluating world history in a world context is indispensable. I have argued that mountaineering has provided a history beyond a national discipline of local sports history in Japan. Through a transnational discipline, I argued that a British diplomat contributed to Alpinism in Japan, and influenced world history, language, geography, and natural science in both Western and Eastern societies.

研究分野：スポーツ史

キーワード：トランスナショナル スポーツ史

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、世界史の中で交錯する人や規範、価値観の移動、文化の流入・受容を読み解く際の盲点を克服するために、トランスナショナリズムに着眼し、個々に創出された多様な作用力が不可視的な影響力を及ぼした結果、事象に変化をもたらす点を重視する「錯綜史 entangled history」を方法論とする。すなわち、伝統的な「一国史(ナショナル・ヒストリー)」による制約を取り払い、近代スポーツという近代の相互依存社会が到来して以後に拡大した文化のトランスナショナリズムな側面に注目することで、世界的な関係性を欠いてきたこれまでのスポーツ史を補完することが可能になる。しかも、トランスナショナリズムを重視する錯綜史は「西欧中心主義史観」を克服し、「地域・エスニシティの世界関係学」、「領域主義を超える知」という 21 世紀的なポストモダンの学際的課題解決に期待される研究方法に相当している。

トランスナショナリズムについては次のように定義される。英国のジョイス・グッドマンは、世界システムの批判的検討は、これまで欧米中心の歴史観に基づき、その評論が繰り返されてきたに過ぎず、こうした傾向に対し、トランスナショナルな志向性は、国家の境界を越えて作用ないし結合する多様な関係性と相互作用により人々や組織が結合する様に注目することを意味すると述べている。同時に、女史は「錯綜史 entangled history」がトランスナショナルな志向性と同様に歴史学の重要な新たな方法論に位置づくことを主張している (Joyce Goodman, “Transnational Perspectives and International Networks of Women’s Education: Britain, The United States and Japan”, Oral Presentation Paper, pp.3-5 given at the seminar, hosted by JWHN: Japan Women’s History Network, at Aoyama Gakuin University, Shibuya campus in Tokyo on February 23d, 2016)。

同氏は「帝国主義はその恰好の例にあたる」として幾つかの例証を試みている。そうした研究視角には、申請者がこれまで行ってきた「帝国主義とスポーツ」を巡る以下の研究の方向性と通底するものがあった。

(1) K. Ikeda, “British Cultural Influence and Japan: Elizabeth Phillips Hughes’s Visit for Educational Research in 1901-1902.”, *The IJHS*, (2014), 31-15.

(1) の論文の中では、大英帝国と英国植民地の拡大に伴い、日本における中等教育機関のモラル形成に英国スポーツ規範の影響が浸透したことを示した。

(2) K. Ikeda, “‘Ryōsai-kembo’, ‘Liberal Education’ and Maternal Feminism under Fascism : Women and Sports in Modern Japan”, *The IJHS*, (2010), 27-3.

また、(2)の論文においては、ドイツおよびイタリアにおけるファシズムが日本における女性の身体運動の文化政治に関与したことに言及した。

(3) K. Ikeda & J.A. Mangan, “Towards the Construction of a New Regionalism? The End of Colonialism: Japanese Response and Reaction to the Games of Asia”, in: *Japanese Imperialism: Politics and Sport in East Asia: Rejection, Resentment, Revanchism*, edited by J.A. Mangan, Peter Horton, Tianwei Ren and Gwang Ok Gateway East, Singapore (Palgrave macmillan), 2017, pp. 337-363.

さらに、本研究の採択後、初年度に出版された(3)の論文の執筆構想を通して、以下の視野を得ていた。

すなわち、第二次世界大戦後、アジアに対する文化的無関心主義を誘発し、アメリカを中心とする資本主義経営の一角に日本を位置づけようとする GHQ の占領政策があった。こうしたアメリカ帝国主義主導の政策は少なからず、体育・スポーツ活動に関与した。

申請者によるこれら 3 つの論文は、大英帝国主義、大日本帝国主義、その延長上に連鎖したファシズムスポーツ史研究を世界史的観点から比較検討したものであった。その中でアジアに共通する諸問題、日英同盟期のスポーツ移入、ドイツ、イタリア、日本にみられるファシズム期の問題、アメリカの占領政策後に誘導された戦後のスポーツ問題も、すべて世界史の共時性の中で進行したことが重要であると指摘している。加えて、ジェンダーの問題もすべてトランスナショナルな関係性が交錯する世界的共時性、国を超えた近代共通の地平を抜きに語れるものではないことを主張している。すなわち、16 世紀以降の大航海時代を経てより後、世界はすでに相互依存社会を構築しつつ発展を遂げてきたことを重視する必要がある、こうしたトランスナショナリズムや錯綜史 entangled history の試みにより世界史を捉え直す最先端のパラダイムをスポーツ史研究に活用することは現代的意義を有する。

従来の研究は「日本スポーツ史」、「アメリカスポーツ史」、「英国スポーツ史」というように、一国史を通して近代社会の特徴を明らかにすることに研究者の興味が注がれてきた。もっとも、そうした国家の枠組みからスポーツ史を特徴づける研究の試みなしに、今日のスポーツ史研究の発展をみることは不可能であった。他方、一国史の枠組みに依拠することで、世界史の中で交錯する人や規範、価値観の移動、文化の流入・受容を読み解く際の盲点も存在した。冒頭で述べたように、近代スポーツというものは近代の相互依存社会が到来して以後に世界化した文化である。したがって、トランスナショナリズムを通して映し出さ

れる現象、創出される多様な作用力の結果（「錯綜史 entangled history」）を重視することで、先行研究を補完し、スポーツ伝播の複雑な態様を明らかにすることが可能になる。

## 2. 研究の目的

以上の学術的背景・研究動機の下で、本研究は「スポーツ史研究におけるトランスナショナルなパラダイムと錯綜史 entangled history の試み」と題し、基盤研究(C)「日英帝国主義に関する比較スポーツ史研究」（平成 26-28 年度）及び基盤研究(C)「日独英比較スポーツ史研究—帝国主義からファシズムへ—」（平成 23-25 年度）を発展的に継承することとした。すなわち、スポーツ史研究の地域比較・協同を超え、国家の枠組みを解体した接近方法—トランス ナショナルなパラダイムおよび錯綜史 entangled history（日本では定訳をみない：歴史事象の影響力が複雑に絡み合っ て影響力を及ぼすことを重視する方法論）を通して、スポーツ史研究における新たなパラダイムの提示を試みることを目的とする。

## 3. 研究の方法

### 【有機的連携・エディター機能と国際的共通課題への接近】

これまで蓄積されてきた一国史の中で整理された研究成果は重要なリソースである。しかし、国際ジャーナルや英語を共通語とする国際学会の場を通してしか研究者はそれらに触れることができず、特に、母国語で書かれた研究論文は、国際言語である英語と比較すると世界的な認知度に乏しい。そのことは課題における共通の地平、連携の機会を逸することにつながっていた。それゆえ、トランスナショナリズムを重視した研究は、研究者間における既存の研究の有機的連携とエディター機能を促すと同時に、同時代資料をトランスナショナルな視野から再検討すること、先行研究の活用と改良の提案につながる。一次史料の読み解きにも方法論的刷新が必要となり、結果、新たな研究視角、パースペクティブが生まれる。そこには領域主義を超える 21 世紀的な知の在り方の模索が反映される。

### 【海外の研究機関との連携】

トランスナショナルな着想を遂行する上で、海外の研究機関との連携は不可欠であった。英国 De Montfort 大学 ICSHC 国際スポーツ史・文化研究所所長・主任教授、Martin Polley 氏とはこれまでも良好な学術交流を継続してきており、英国スポーツ史学会元会長、リーズ・メトロポリタン大学（研究開始当初の所属先）Carol Osborne 氏とは初年度に北大で開催の国際セミナーで合同した。IJHS 国際スポーツ史ジャーナルの創始者 J. A. Mangan 氏とは、初年度に共著論文を刊行し、かつ同氏が責任編集を務める国際刊行物にも寄稿した（末尾に示した成果としての著作物一覧の通り）。さらに、IJHS の責任編集を受け継ぎ、スポーツ経済史を牽引する Wray Vamplew 氏が責任編集を務める IJHS からも依頼を受け、方法論に関する英語論文にも寄稿した（末尾に示した成果物の刊行一覧の通り）。

### <研究方法>

トランスナショナルなパースペクティブ、錯綜史 entangled history の方法論を通して、19 世紀末から 20 世紀前半にかけての帝国主義・ファシズム期のスポーツ史を再検討する。具体的には帝国主義、ジェンダー、ファシズムに注目しながら、19 世紀末から 20 世紀前半を貫く世界史の権力構造の世界的共時性とヘゲモニーの作用力を通してトランスナショナルな共通課題に接近する。すなわち、「大日本帝国主義」や「アメリカ帝国主義」が与えたスポーツへの影響といった従来の研究視角を跨ぐ、共通した「帝国主義」そのものがスポーツに与える影響、多様な作用力が複雑に絡み合うボディ・ポリティクスへの関与を解明する世界史の提示を行った。

### <先行研究の整理>

一次資料の収集、研究方法を補強する二次資料の解読に努めた。とりわけ、以下の文献から方法論上の示唆を得た。

・ Goodman, J., McCulloch, G. & Richardson, “ ‘Empires Overseas’ and ‘Empires at Home’: Postcolonial and Transnational Perspectives on Social Change in the History of Education”, *Paedagogica Historica*, 45, 2009, 695-706.

・ Popkewitz, Thomas (ed.), *Rethinking the History of Education: Transnational Perspectives on its Questions, Methods and Knowledge*, London: Palgrave, 2013, pp.93-108.

・ Popkewitz, Thomas, Comparative Studies and Unthinking Comparative “Thought”: The Paradox of “Reason” and its Abjections. In: M. LARSEN (ed.) *New Thinking in Comparative Education: Honouring Robert Cowen*, London: Sense Publishers, 2010.

・ Saunier, P., *Transnational History*, London: Routledge, 2013.他

### 【帝国主義・ファシズムおよび広義の政治性を射程に置くスポーツ史に関する研究論文】

以下の論集にも注目した。

・ Jonathan Grix 編 *Sport Politics* の Volume 1-4: 広義の政治性とスポーツの問題を扱う良質な研究論文集( 連携する海外の研究協力者による論文を含む ) 各巻に 14 論文( Vol.1: Sport in History ) 16 論文( Vol.2: Sport and International Relations ) 16 論文( Vol.3: Sport and domestic Politics/ Policy ) 15 論文( Vol.4: The Politics of Sport ) の合計 61 論文が収録されている。

・ Vamplew, Wray & Dyreson, Mark 編著 *Sports History*. 4 vols. (Sage Library of Sports Studies) 1449 pp. 2016:7 (Sage, UK) の 4 巻本 ( 全 67 論文を収録 ) も入手した。

【19 世紀・20 世紀前半スポーツ史関連一次史料】と上記の先行研究を解読しながら、19 世紀以降の相互依存社会におけるネットワークの重要性、トランスナショナルな構築性に注目した。錯綜史 entangled history の方法論の有効性を示し、新たなる世界的共時性と影響力から明らかになる帝国主義、ファシズム、ジェンダーとスポーツ史の関係史について総説を導くことを目標とした。それにより、極東の片隅にある小国のスポーツの問題であると捉えられてきた日本におけるスポーツ史研究の成果を国際的な関係性の中で生じた世界史の問題として、研究の俎上に載せ、世界をつなぐ 良質なスポーツ史研究ネットワークの構築が可能となった。なお、出版物を通してのみならず、研究成果は ISHPES 国際体育スポーツ史学会、その他の国際セミナー、国内学会・研究会の機会を通じて公表に努めた。

#### 4 . 研究成果

本研究はジョイス・グッドマン Joyce Goodman 氏の日本講演記録論文、"Transnational Perspective and International Networks of Women's Education"(Tokyo: Aoyama Gakuin University,2016) 及び同著者による "Circulating Object and (Vernacular ) Cosmopolitan objectivities", International journal for the historiography of education: *IJHE*, 2017, 17-1)を始めとする一連の論文から方法論上の示唆を得て開始された。初年度の 2017 年 12 月 5 日には上記の方法論をスポーツ史研究に活用し、"Transnational Paradigm in the Study for Sport and Entangled History"と題する国際セミナー( 北海道大学教育学部大会議室 ) を主催、イントロダクションを担当した。本セミナーでは研究連携者である Carol Osborne 氏を英国リーズ・ベケット大学より招へいし、本研究が掲げるトランスナショナルな方法論への接近を試みた。同時にカナダより特任助教として北海道大学に滞在中のタイリル・エスケルソン Tyrel Eskelson 氏による東京五輪分析研究を通じて、トランスナショナルな方法論の具体的な可能性について議論する好機を得た。本国際セミナーの成果の一部は研究代表者が編集者を務める *Media, Sport, Nationalism: The Rise of East Asia* (Logos Verlag Berlin, March 2019)として出版された。エスケルソン氏の論稿、"Continuity or Change: After the Tokyo Olympic Games 1964: Exploring the Tokyo Games 2020 through various Critical Reviews"および Keiko Ikeda, "Democracy through the Lens of Sport Journalism: Japan and the East Asian Olympic Games"の 2 論文が上記の出版物に含まれている。加えて同年、本研究の成果として国際共著を含む、以下の 3 篇の論文も刊行した。

<2017 年度 >

- (1) Keiko Ikeda, "The Itinerary to Explore Headwaters of the New Left's Cultural Studies", *The International Journal of the History of Sport*, 34(5-6), 2017, 346 – 350.
- (2) Keiko Ikeda & J.A. Mangan, "Towards the Construction of a New Regionalism? The End of Colonialism: Japanese Response and Reaction to the Games of Asia", in: *Japanese Imperialism: Politics and Sport in East Asia: Rejection, Resentment, Revanchism*, edited by J.A. Mangan, Peter Horton, Tianwei Ren and Gwang Ok Gateway East, Singapore: Palgrave macmillan, 2017, pp.337-363.
- (3) Keiko Ikeda, "The History of Modern Sport in Japan: the British Influence through the Medium of Sport on Imperialism, Nationalism and Gender with Reference to the Works of J. A. Mangan", in: *Manufacturing Masculinity the Mangan Oeuvre Global Reflections on J.A. Mangan's Studies of Masculinity, Imperialism and Militarism*, edited by Peter Horton Logos Verlag Berlin GmbH, 2017, pp.133 – 157.

<2018 年度 >

2018 年度における「スポーツ史研究におけるトランスナショナルなパラダイムと錯綜史の試み」は、引き続き、海外の研究者との協力体制のもとで次の論文を国際学会で公表した。

- (1) K. Ikeda, "The Possibility of Historical Studies on 'Bodily Democracy' towards Recent Arguments on Sustainable Development Studies through Transnational Analysis", The 19th ISHPES: The International Society for the History of Physical Education and Sport 2018, Munster, ドイツ, 2018 年 7 月 18 日)。

さらに、前年度の国際セミナーの成果として、下記の編著論文も年度末に公刊された。

- (2) K. Ikeda, "Democracy through the Lens of Sports Journalism: Japan and the East Asian Olympic Games", Tianwei Ren, Ikeda Keiko and Chang Wan Woo (eds.), *Media, Sport, Nationalism: The Political and Geopolitical Rise of*

上記はいずれも、トランスナショナルな方法論を意識し、スポーツ史の世界史的位相を描くことに挑んだものである。(1)では身体民主主義とSDGsの関係をトランスナショナリズムの観点から分析し、(2)では、日本におけるスポーツジャーナリズムの成立を、英国におけるスポーツジャーナリズムの成立史と対置させつつ、単なる比較研究ではなく、世界史的観点からの尺度評価の必要性について論じ、かつ、日本、中国、韓国といった国家単位のフレームをメディアとオリンピックの関係史から捉え直し、トランスナショナルな方法論に即したメディア史が新たな世界史像を胚胎していることを編著者として指摘するに至っている。

<2019年度>

最終年度には一層の進展があった。具体的には、下記の論文を国際学会において公表することによって、本研究の目指す方向性の妥当性に確証を得るに至った。

- (1) Keiko Ikeda, "A Diplomat in Japan, Sir Ernest Mason Satow and Modern Mountaineering in the late Nineteenth Century Japan", The 20th ISHPES: International Society for the History of Physical Education and Sport, Madrid, July 17th, 2019.

上記は英国人が黎明期の山岳スポーツの開拓に果たした役割について論じたものであり、日本アルプスの名称の定着が、アーネスト・サトウによる英国での講演を通じて普及したものであることを同時代史料から指摘している。さらに、サトウの次男で北大でも教えた武田久吉の言からその関係性に踏み込んだ。サトウの功績は山岳スポーツへの貢献のみにとどまらない。英国人は山岳スポーツを通して、気象学、地理学、植物学、言語学、歴史学に貢献し、その成果を世界に発信した。帝国主義的な西欧技術の往来が世紀転換期のスポーツを含むあらたな広義の文化に影響しただけでなく、双方向で日本の慣習文化が西欧社会に翻訳されたことを示している。トランスナショナルな歴史の具体像は、こうしたあらゆる科学を投じる山岳スポーツの開拓を通じた事例研究を深めることで一層明晰になると論じた。

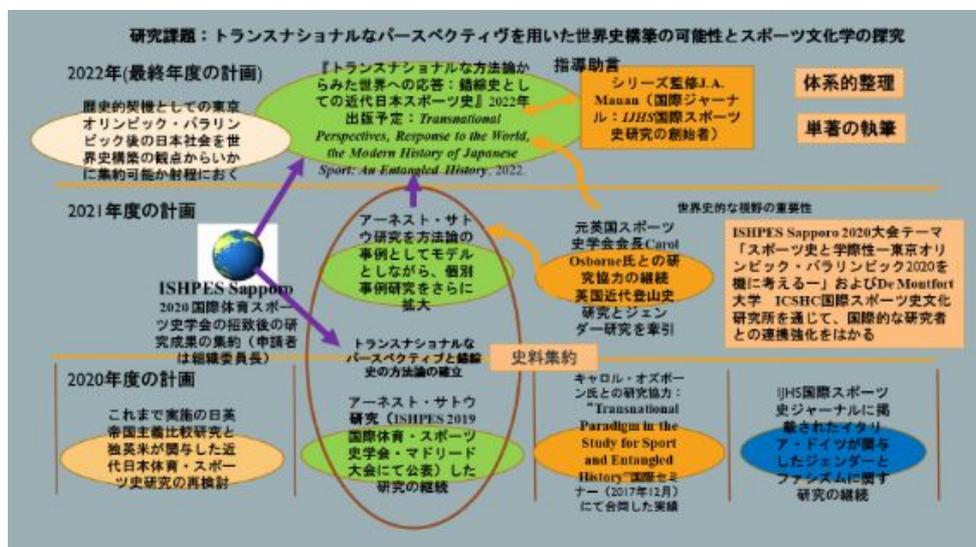
加えて、以下の著作も刊行するに至った。

- (2) Keiko Ikeda, "Women and Physical Culture in Japanese History", *The Routledge Companion to Gender and Japanese Culture*, edited by Mark Pendleton, Jennifer Coates and Lucy Fraser, December, Routledge: London & New York, December 2019, pp.251-260.

上記の論文においては、世紀転換期の身体文化と女性について、日本における女性スポーツの発展が英国とのトランスナショナルな関係性を抜きに語れないものである点について論じている。トランスナショナルな方法論が得意とするヘテロトポスな空間論的転回と帝国主義との関係を捉えることにより、その歴史を描くことに成功したと考えている。

以上の研究成果を通じて、トランスナショナリズムを方法論に据えた新たな世界史の中のスポーツ史研究に関する体系的な図書の執筆に可能性が開かれることとなった。なお、本研究の成果を踏まえ、今後の研究として、以下の出版物の構想を計画するに至っている。

Keiko Ikeda, *Transnational Perspectives, Response to the World, the Modern History of Japanese Sport: An Entangled History*, Peter Lang International Publishers, 2023. (『トランスナショナルなパースペクティブを用いた世界史構築の可能性とスポーツ文化の探究』)



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Keiko Ikeda	4. 巻 国際学術論集
2. 論文標題 Democracy through the Lens of Sports Journalism: Japan and the East Asian Olympic Games	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 論集タイトル Tianwei Ren, Ikeda Keiko and Chang Wan Woo (eds.), Media, Sport, Nationalism: The Political and Geopolitical Rise of East Asia Soft Power Projection via the Modern Olympic Games	6. 最初と最後の頁 105-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Keiko Ikeda	4. 巻 34 (5-6)
2. 論文標題 The Itinerary to Explore Headwaters of the New Left 's Cultural Studies	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The International Journal of the History of Sport	6. 最初と最後の頁 346-350
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.1080/09523367.2017.1381599">https://doi.org/10.1080/09523367.2017.1381599</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Keiko Ikeda & J.A. Mangan	4. 巻 Singapore Palgrave macmillan
2. 論文標題 Towards the Construction of a New Regionalism? The End of Colonialism: Japanese Response and Reaction to the Games of Asia	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 論集タイトル Japanese Imperialism: Politics and Sport in East Asia: Rejection, Resentment, Revanchism edited by J.A. Mangan, Peter Horton, Tianwei Ren and Gwang Ok	6. 最初と最後の頁 337-363
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Keiko Ikeda	4. 巻 Logos Verlag Berlin GmbH
2. 論文標題 The History of Modern Sport in Japan: the British Influence through the Medium of Sport on Imperialism, Nationalism and Gender with Reference to the Works of J. A. Mangan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 論集タイトル Manufacturing Masculinity the Mangan Oeuvre Global Reflections on J.A. Mangan ' s Studies of Masculinity, Imperialism and Militarism edited by Peter Horton	6. 最初と最後の頁 133-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Keiko Ikeda
2. 発表標題 The Possibility of Historical Studies on 'Bodily Democracy' towards Recent Arguments on Sustainable Development Studies through Transnational Analysis
3. 学会等名 The 19th ISHPES : The International Society for the History of Physical Education and Sport (Munster, 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Keiko Ikeda
2. 発表標題 Transnational Paradigm in the Study for Sport and Entangled History
3. 学会等名 One-day Seminar entitled "Olympism, Legacies and Methodologies of Sport History December" (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Keiko Ikeda
2. 発表標題 A Diplomat in Japan, Sir Ernest Mason Satow and Modern Mountaineering in the late Nineteenth Century Japan
3. 学会等名 The 20th ISHPES: International Society for the History of Physical Education and Sport (Madrid, July 17th, 2019). (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Keiko Ikeda	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 424 (251-260頁を担当)
3. 書名 "Gender and Physical Culture in Japanese History", in: The Routledge Companion to Gender and Japanese Culture (the 'Work') edited by Mark Pendleton, Jennifer Coates and Lucy Fraser ('the Editor').	

1. 著者名 池田恵子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 224 (16-17頁を担当)
3. 書名 「帝国主義とジェンダー」 (飯田 貴子、熊安 貴美江、來田 享子編著) 『よくわかるスポーツとジェンダー』	

1. 著者名 池田恵子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 224 (24-25頁を担当)
3. 書名 「欧米社会における女性とスポーツ」 (飯田 貴子、熊安 貴美江、來田 享子編著) 『よくわかるスポーツとジェンダー』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Research Map <a href="https://researchmap.jp/read0187331/">https://researchmap.jp/read0187331/</a>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考